

文庫あれこれ◆寒中お見舞い申し上げます。12日には、大室高原に初雪が降ったそうですね。その頃、私は、フィンランドの北、ラップランドにオーロラを観に出かけていました。◆残念

ラップランド・イヴァロ空港の壁絵

ながら、ロシアの国境まで行きましたが、オーロラは現れてくれませんでした。◆でも、ようやく朝10時すぎに空が青から白へと変わり、午後



3時頃には夜の帳りが降りる、マイナス10℃の静寂の雪に包まれて、束の間、幻想世界を味わいました。◆文庫の本は今年中、寄付くださる皆さんに支えられ、1

オーロラの出現を待つ間
暖をとる人々



万冊に届きそうです。手に採りたい本はありますか？どうぞ、皆さんのお声を聞かせてください。◆旅行に、『見残しの塔一周防国五重塔縁起』（久木綾子著 文春文庫）を持参しました。主人公の若者のひたむきさに久しぶりの爽快感を憶えました。最後に著者の略歴をみてびっくり。何と1919年生まれ。はじめてのこの作品を2008年、89歳で出版しています。してやられた、と思いました。68ですっかり老人になった積りではだめ、ですね、

会員には四捨五入したら100歳になるIさんもおられます。みなさん今年も健康で佳い日を築きましょうね。



トナカイのソリに乗りました (西村)

◆2012・文庫の催し物◆

☆若葉のころのおはなし会☆

5月19日 午後5:30~7:30(大きい人向け)
20日 午前10:30~11:30(子ども向け)
(アートフェスティバル参加16~20日)

☆海の日のおはなし会☆

7月15日 午後5:00~7:30 伊豆高原駅・大楠木下

♥文庫開館記念子どものためのおはなし会♥

7月16日 午前10:30~12:00

㊦秋の夜長のおはなし会㊦

10月20日 午後5:00~7:00(おとなの人向け)

㊦秋のおはなし会㊦

10月21日 午前10:30~11:30

あとは、クリスマスおたのしみ会ね!

☆☆今後の開館ス秋ケジュール☆☆

◆新年1月は変則21日(土)、22日(日)

◆2月は通常18日(土)、19日(日)

◆3月は変則24日(土)、25日(日)

◆4月は通常14日(土)、15日(日)

◆5月は変則16日(水)~20日(日)開館

◆6月は通常16日(土)、17日(日)

◆7月は通常14日(土)、15日(日)

☆15日は夕から、海の日のおはなし会☆

海の日16日(月)は、開館記念日

◆8月は、15日(水)~19日(日)

☆☆夏休みロングオープン☆☆

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》

おはなし・沙羅の勉強会は

毎月第3土曜11:00~13:00

連絡先：沙羅の樹文庫 話0557-51-3737

伊豆高原の暮らしの中に生まれる身近な喜びをお伝えするコーナーを始めました。
身近な楽しいホット原稿、お待ちしております。
atsuko@big.or.jp 又は03-3709-7840FAXまで

No.65 2012年1月号

沙羅の樹文庫だより



真剣に

風揚がっている人のあり

天と何かを

話しているごとし

(小島 正樹)

新しい年がはじまりました。
日本の大地に、人々の心に、
希望が芽吹く日々でありますよう。

今年も、沙羅の樹文庫で
心ときめき、温まるひとときを
ご一緒しましょう!

伊豆高原 たより No.3



ニマス Anonymous (匿名)
2005年製作された映画「V フォーヴェンデッタ(V for Vendetta)」では全体主義の政府を破壊するために暗躍するアナキスト、仮面を破った“V”が登場します。

シティーには“V”の仮面を被ったアノニマスも登場。イランの核施設を標的とした「スタックスネット」と呼ばれるコンピューターウイルスが、イスファハンの核関連施設を爆発。

イランの核施設を標的とした「スタックスネット」と呼ばれるコンピューターウイルスが、イスファハンの核関連施設を爆発。イランのサイバー部隊、アメリカの無人偵察機「RQ-170 センチネル」を強制着陸、ミサイルや銃弾が一発も飛ばない静かなサイバー戦争が始まっています。

ラスベガスのハッカー競技会「DEFCON(デフコン)」では、日本チームは残念ですが最下位でした。

ステファン・ウォズニアック、ティム・バーナーズリー、リーナス・トーバルズ、日本人では下村努(ノーベル化学賞を受賞した下村脩氏の息子)が超凄腕のハッカーとして有名です。お寒い状況の日本でも、動物園よりも秋葉原、漫画よりも家電の取扱説明書が好きなお子、公立中学の2年生の浅野君の将来に情報処理推進機構(IPA)は期待しています。サッカー少年は明るく健康的、ハッカー少年はネクラでオタクという、一字違いでまったく正

一の足元にも及びませんが、私のサイバー攻撃でまんまとこの侵入に成功したものの右絵のようになっていたらくではまったく締りません。



新規一転、年末には最新規一転、年末には最新のパソコンを買いました。腕は3流、道具は一流。今年は新たなサイバー攻撃を仕掛けた。飛躍の年にしたいと願っております。

『獣の奏者』を読んで

この本は、エリンという少女が主人公のお話です。この中には、「闘蛇」や「王獣」という架空の動物がでてきます。でも、本当にあった話のように感じています。

エリンは幼いころに父を亡くして、母も処刑されてしまいます。その後、はち飼いのジョウンに助けてもらいます。

エリンは、人々が、秘法を使うとおそれられている一族の子です。瞳の色を見ればわかります。ジョウンはそれでも、そのまま助けてやり、高い薬で看病してやりました。すごく心のやさしい人だと思いました。

エリンはお金を持っていないので薬のお金が払えません。そこで、まだ幼いのに、何でも働くからお願いと頼むのです。しっかりと自分のことを考えて、人のことも考えて、すごいと思いました。普通、母が処刑されたら何も考えられなくなるだろうに、エリンはすごいです。

色々考えるところが多い本だと思います。

田中 咲穂(八幡野小6年)

新しく入った子どもの本

えほん・読み物：

『かあさんあひるのたび』(エリック・バトウー作 広松由希子訳 講談社) 『土神ときつね』(宮沢賢治作 大畑いくの絵 ミキハウス)

『小川未明30選』(小川未明著 春陽堂書店)

『魔女の宅急便』(角野栄子作 広野多珂子絵 福音館書店)※2、3(ペーパーバック)、5、6(ハードカバー) ※1と4はすでに在庫。これで、全部揃いました。

『みつけよう! ふゆ』(ビーゲンセン作 永井郁子絵 絵本塾出版) 『そらからのめぐみ』(ビーゲンセン作 永井郁子絵 汐文社)※2冊著者より寄贈

***そのほか、いつもの広瀬さんより、たくさんたくさん寄贈いただきました。お楽しみにね!**

新しく入った大人の本

フィクション：『ジェノサイド』(高野和明著 角川書店 11) 『水の枢』(道尾秀介著 講談社 11) 『マザーズ』(金原ひとみ著 新潮社 11) 『くちぬい』(坂東真砂子著 角川春樹事務所 11) 『春の先の春へー震災への鎮魂歌 宮沢賢治「春と修羅」をよむ』(宮沢賢治・古川日出男著 左右社 12)※CD付き。

『ティエンイの物語』(フランソワ・チェン著 辻由美訳 みすず書房 11) 『ウルフ・ホール 上・下』(ヒラリー・マンテル著 宇佐川晶子訳 早川書房 11)※ブッカー賞、全米批評家協会賞等受賞作品。『二流小説家』(デイヴィッド・ゴードン著 青木千鶴訳 早川書房 11)※日本でのミステリー賞3冠受賞)

ノンフィクション：『あんぱん一孫正義伝』(佐野真一著 小学館 12) 『異郷の陽だまり』(野見山暁治著 生活の友社 11) 『ぐずぐずの理由写真の裏の真実』(岸本達也著 幻戯書房 11) 『つなみ』の子どもたち(森健著 文藝春秋 11) 『新しい絵本1000 2001~2009版』(「この本読んで」編集部編 NPO 読書サポート 09)

新書：『河内源氏』(元木泰雄著 中公新書 11) 『知れば知るほど面白い古代韓国の歴史と英雄』(康熙奉著 実業之日本社 11) 『お手本の国』のウソ(田口理穂ほか著 新潮新書 11)

文庫：『おなか ほっぺ おしり【完全版】』(伊藤比呂美著 中公文庫 11) 『にんげんのおへそ』(高峰秀子著 新潮文庫 11)

『大人もぞっとする初版グリム童話』(由良弥生著 王様文庫三笠書房 02)

『破壊者』(未ネット・ウォルターズ著 創元推理文庫 11) 『変死体 上・下』(パトリシア・コーンウェル著 講談社文庫 11) Etc.

文庫の棚を掘りおこしてみると・・・

★『君たちはどう生きるか』(吉野源三郎著 ※文庫の棚在)と新しい本『僕は、そして僕たちはどう生きるか』(梨木香歩著 理論社 11)：書店でみつけた梨木さんの本、どこかでこのタイトル見た、と思ったら、中学1年の時読んだ『君たちはどう生きるか』の現代版だと言ったら、著者は怒るだろうか。きっと、60歳年代周辺の人には1度は読んだのではないだろうか。吉野さんの本は私を社会へ目を向けさせてくれた初めての本。担任の先生とクラス全員と輪読した忘れられない本だ。ただこの2冊、扱う問題は少し違う。あなたも、著者、読者、社会事情、さまざまな違いの中で、もう1度、どう生きるか、どう生きたか、ふり返ってみませんか。(さ・ら)

わたしのお薦め (2011年に読んだ本の中から)

だんだんに読める本の量が減ってきました。5年前は150冊以上を目標にがんばっていたのですが今はその半分です。根気が続かないということでしょうか。つい他の安易な方に流れてしまいます。それでもたくさんのすてきな本に出会えたのは嬉しいことです。

絵本を2冊入れました。沙羅の樹文庫にはいい絵本がたくさんあって、こんな田舎ではなかなか目にふれにくい極上の絵本がそろっていてしあわせです。今年も子どもの本も含めて心豊かになれる本にいっぱいいっぱい出会えますように。(中西 景子)

	著者名	書名	出版社	ひとこと
1	ペーター・シュナイダー著 八木輝明訳	せめて一時間だけでも	慶応義塾大学出版会	ホロコーストからの生還の話
2	ミシェル・マゴリアン著 小山尚子訳	イングリッシュローズの庭で	徳間書店	戦火を逃れた少女の成長の物語
3	後藤正治著	清冽・詩人茨木のり子の肖像	中央公論新社	自分の感受性くらい自分で守れ、ばかものよと叱る詩人

4	佐藤泰志著	海炭市叙景	小学館文庫	幻の遺作の復刊 日常の風景
5	津村節子著	紅梅	文芸春秋	夫吉村昭の最後の日々
6	池井戸潤著	下町ロケット	小学館	夢のある仕事をする人々
7	小川糸著	食堂かたつむり	ポプラ社	故郷で開業した食堂のメニューはとても魅力的です。
8	申京淑著 安宇植訳	母をお願い	集英社文庫	母が行方不明になった。兄妹それぞれの立場が浮き彫りに・・・。
9	エリナー・ポーター著 中村妙子訳	ぼく、デビッド	岩波少年文庫	ヴァイオリンで気持ちを表現できる孤児の少年
10	井上ひさし著	ナイン	講談社	「握手」を含む短編集
11	マイケル・モーバーゴ作 さくまゆみこ訳	モーツァルトはおことわり	岩崎書店	絵本です
12	K・チュコフスキー作 田中潔訳	フェドーラばあさんおおわり	偕成社	絵本です

『わたしの生まれた部屋』(ポール・フライシュマン著 谷口由美子訳 偕成社 1999)

冒頭、主人公(もしくは、この物語の語り手らしき人)によってある部屋の様子が語られます。(読んでいる私は、ああ、これがタイトルの部屋なのだ、と思い、)そして、聴き手に向かって「あなたはきっと、そんな部屋をいくつも見たことでしょうね。」と言う。「えっ? どういうこと? 聴き手は誰なの?なぜ、そんな部屋をいくつも見ているの?」という謎を読者は抱えたまま、このお話は最後までゆっくりと、静かに続いていきます。そして最後から5行目によろやく、姿がみえないこのお話の相手(聴き手)が、若い絵描きであり、死に行く人々の最後の肖像を描いている人だということがわかります。

唐突にはじまった物語は、ぼんやりと少しずつ、語り手である主人公の少女時代へと運ばれてゆきます。おじいちゃん、おとうさん、おかあさん、おねえさんふたりにおにいさん、アメリカ開拓時代後期の家族の営みが、ジョージナ(1851年生まれ)という少女の感性を通して綴られます。

教会へは行かず、自然、生きとし生きるものを神として受け入れているおじいちゃんは、その昔、ニューハンプシャーから妻と生まれたばかりの赤ん坊を馬車に乗せ、ここオハイオにやってきました。オハイオは、トウモロコシも小麦もホイホイ獲れると聞いて!?そして緑の森を伐採して、サトウカエデの大きな木のそばに、故郷のニューイングランド風の家を建てたのです。そして、台所の奥には、故郷と同じ、赤ん坊の生まれる部屋を作ったのです。このおはなしは、この部屋で起きた、この部屋が長い年月、見続けてきたこの家族の歴史です。(中略)年老いてお迎えを待つジョージナに、この部屋は何を思い出させたでしょう。この先はあなたが読んでください。数年前に読んで、このお話に流れる心の静謐さがいつか、私に流れ込んでくるようでした。(さ・ら)

最近お借りした本についての読後感

2012年1月20日 By 森林浴

「連合艦隊司令長官 山本五十六」 半藤一利
著 文芸春秋社刊 2011年11月刊

この本は著者が郷里、新潟出身の尊敬する大日本帝国海軍連合艦隊司令長官山本五十六について座談形式で語ったものを出版社が本にしたもの。いわば半藤氏による『山本五十六賛歌』とでもいうべきもので、そこにはノンフィクションものにあるような、欠点や失敗も拾い上げるような厳しさは無い。(1月6日の朝日新聞の取材では、著者は、山本長官は『口が重くて部下に説明しなかったことで、リーダーの素質が欠けていた』と述べているが。)

出だしのところで、著者は維新のときの官軍(薩長土肥)と幕府側の会津などの諸藩との遺恨の続きで、西軍(官軍)の末裔が太平洋戦争を始めて国を滅ぼす寸前まで行ったが、東軍(幕府側—山本五十六は新潟出身で東軍側。)の末裔が戦争を終わらしてくれた、と言う。思わず、わが親戚の元帝国海軍のサムライ生き残り(現在94歳・伊東市在住。福岡県人の海軍兵学校卒)がよく言う、「太平洋戦争は北・東出身の山本五十六・米内光政などがダメだったから負けた、俺達みたいな南・西出身が指導していたらなあ」とのボヤキを思い出した。

「馬達よ、それでも光は無垢で」古川 日出男
著 春秋社刊 2011年7月刊

強い、詩のような文章。もともとこの人は文学を作りながら、同時に音楽やダンスなどとの合奏を企図しているらしいが、この文章は、いわばパーカッションの

ように、鳴って、飛んで、煌めいて、そして駆けて行く。福島県でも中通り郡山に生れた著者は、東北を舞台にした注目を集めた自分の著書『聖家族』を土台にして、3.11から1月経った相馬市に行き書き始める。全編に馬は不可欠の主題である。

「半島へ」 稲葉 真弓著 講談社刊 2011年5月刊

この人の作品は初めて読む。綺麗な、見事な文章を書く人。きっと聡明な女性なのだろう。始めは、「半島へ」という半島は伊豆半島とばかり思っていたが、なんと紀伊「半島」だった。細かい観察で描かれる多彩な自然と、周りに住む人たちとの交流、そして病気で片足切断した母、東京のマンションの隣人達、一緒に働いた友人たち、自死した友達、などとの思い出が巧みに織り込まれている。特に「半島」での友人、蜂蜜栽培の友達との交流が印象深い。

「呪いの時代」 内田 樹著 新潮社 2011年11月刊

最近ネット上で、他人の小さな欠点をことさら取り上げて、悪口を言うことが蔓延していることについて、それは間違いだと批判している。著者の言い分・趣旨はよくわかるが、全体として彼の本にしては少し迫力不足。「あとがき」によると、彼がしゃべった談話を編集者が文章にした、とあるがそれが原因なのかも。確かに日本では、他人の発言・行為に対するケチ付けや、足の引きずり下ろしが多い様な気がする。これは、むしろこの小さな島国特有の「嫉妬心」が主因ではないのか。ライブドアのホリエモンの失墜やソフトバンクの孫正義への批判などはその好例であると思う。

「安宅コレクション余聞 美の獵犬」 伊藤 郁太郎著 日本経済新聞社刊 2011年6月刊

倒産した安宅産業のオーナー安宅英一氏の下で、「美術品室長」として美術品の収拾に携わった著者の回想録。まあ骨董好きな人には面白い本。しかし安宅コレクションの三本柱—中国陶磁、韓国陶磁、速水御舟の絵—のうち、ここでは陶磁のみが対象になっている。骨董のことで、小林秀雄や白州正子の面白い随筆が忘れ難いが、此の本は言ってみれば骨董狂の奇人会長安宅英一氏の「雇われ人」の思い出話なので、自分が見つけた作品にとことん惚れ込んで振り回されるという面白さには欠ける。しかし、真ん中辺にある図版・解説にある骨董品の写真は素晴らしい。

「持ち重りする薔薇の花」丸谷才一著 新潮社刊 2011年11月刊

著者の8年ぶりの長編小説!と腰巻の宣伝文句にある。もと経団連会長(財閥系商社の社長でもあった)が語り手で、ジュリアード音楽院に学んだ日本人学生が卒業後結成したカルテット(弦楽4重奏団)の4人の男とたまたま知り合ってから30年間の人間悲喜劇のある出版界の重鎮にこれを回顧して披瀝し、これを小説にして書いてくれと内輪話しをするという、つまり会話形式になっており、その見事な話術=記述で、一気に読者を乗せてしまう、その巧さは大したものだ。実際私は200ページのこの本を2時間くらいで一気に読んでしまった。でも著者はこれで一体何を言いたかったのだろうか——人間とは、人生とは所詮こんなものでも?